

## 小学校特別支援学級における音楽を中心とした「自立活動」の取り組み

和歌山大学教育学部 上野智子(研究代表)、菅 道子、山崎由可里  
和歌山市立加太小学校 龍神美紅、志賀文香、道法拓大

### 1. 研究の趣旨

本研究は、大学教員と公立小学校教員との連携による音楽を活用した「自立活動」の実践を通して、特別支援教育において「音楽すること」の可能性や支援の在り方を解明することを目的としている。2022(令和4)年度は共同研究の1年目であることから、①音楽を活用した「自立活動」について大学教員と小学校教員の間で共通認識を持つこと、②児童の実態を踏まえた上で授業を考案・実践し、検討を行うことを中心に取り組んだ。

### 2. 研究の経過

研究経過を以下に示す(表1)。

表1 2022年度の研究経過

回	月日	内容
第1回	8月24日	◆研究の趣旨の説明 ◆音楽を活用した「自立活動」のこれまでの取り組みについて ◆児童の実態についての情報共有 ◆今年度の研究計画について
第2回	12月17日	◆実践に向けての打ち合わせ
第3回	12月19日	◆授業実践(授業後に校長先生からのコメント)
第4回	12月26日	◆カンファレンス(実践の振り返り)

### 3. 児童の実態と授業づくり

#### (1) 児童の実態

特別支援学級は、2学級(知的障害...2年生1名・5年生1名、情緒障害...1年生1名・4年生1名)ある。「自立活動」については、トランプなどのゲーム活動や、ソーシャルスキルトレーニングなどを2学級合同で行っている。児童たちと教員たちとの信頼関係も構築されており、関係も良好である。一方、児童それぞれは手先を器用に使ったり動きを模倣したりすることが苦手、新しい環境に戸惑ってしまう、自らコミュニケーションをとることに躊躇してしまう、反抗期に入りつつあることから心理的に不安定になることがある等、個別の課題を抱えている。また、児童同士の関係も良好ではあるものの、発達に個人差があることから一緒に何らかの活動をすることが難しい場面がある。こうしたことから、心理的な安定、他者とコミュニケーションをとることや関係性を築くことがすべての児童の課題となっている。

#### (2) 音楽を活用した「自立活動」の授業づくりと「自立活動」の内容項目との関連

上述の児童の実態を踏まえ、12月に授業実践を行うことにした。時期に配慮して单元名を「クリスマスの音楽を楽しもう」とし、クリスマスに関連した楽曲を用いたりしながら、鑑賞や歌唱、身体表現、楽器の演奏(即興演奏含む)を行うことにした。また、音楽活動の中には、児童同士が交流できるような内容を含めた。なお、本実践の目標および活動内容と「自立活動」の内容項目との関

連についても整理した(表 2)。

表 2 目標および活動内容と「自立活動」の内容項目との関連

目標:友達と一緒に音楽を聴いたり、楽器を鳴らしたり、ダンスをしたりする	
目標に該当する「自立活動」の内容区分	目標に該当する「自立活動」の内容項目
2. 心理的な安定	①情緒の安定
3. 人間関係の形成	①他者との関わりの基礎 ③自己の理解と行動の調整 ④集団参加への基礎
5. 身体の動き	①姿勢と運動・動作の基本技能
6. コミュニケーション	⑤状況に応じたコミュニケーション

#### 4. 授業実践 (12月19日)

12月19日(月)の1限時に授業実践を行った。参加者は特別支援学級児童4名、大学教員2名、学部生4名、小学校教員3名(特別支援学級担任2名、2年生担任1名)、学校長の14名である。表3は本時の展開である。

表 3 本時の概要

プログラム	★該当する「自立活動」の内容区分と項目 ・活動の概要、使用楽器等
1. あいさつ(歌唱) 《こんにちは!》	★3① ・歌に合わせて一人ずつ挨拶する。 使用楽器等:キーボード
2. やさしく うたおう(歌唱、鑑賞) 《もみの木》	★3③④① ・楽曲をユニゾン(A)と二部合唱/合奏(B)の部分に分ける。児童は(A)の部分では歌唱し、(B)の部分では鑑賞する。 ・範唱を鑑賞した後に(A)の部分の歌唱練習を行い、その後通して歌唱・鑑賞を行う。 使用楽器等:フルート、サクソ、キーボード
3. うごいて ひょうげんしよう(身体表現) 《ジングルベル》《ウィンターワンダーランド》《そりすべり》	★4④、5① ・円になり、手をつないでファシリテーターの誘導のもと、動く。 ・1人が音楽に合わせた動き(パターン)を示し、他の人はそれを真似る。動きを示す人はある程度行ったら別の人と交代する。 使用楽器等:音源を使用(プレイヤー&スピーカー)
4. よくきいて やさしく ならそう(器楽、即興表現) 《一緒にならそうよ》	★2①、6⑤ ・1人ずつ行う。自分で楽器を選択し、ファシリテーターとのやり取りの中で、即興表現を行う。 使用楽器等:お鈴、エナジーチャイム、レインスティック、ハピドラム、スリットドラム
5. みんなで たのしく ならして うたおう(歌唱、器楽) 《あわてんぼうのサンタクロース》	★3④)、4④ ・みんなで歌いながら擬音が出てくる箇所では楽器を演奏する。楽器は歌詞ごとに変えつつ、最後は自分の好きな楽器を選んで演奏する。 使用楽器等:フラッグ鈴、タンバリン、取手付シェーカー、サクソ、キーボード
6. ふりかえり	・今日の活動をふりかえる
7. おわりのうた 《Thank you for the Music》	・みんなで歌いながら、名前を呼ばれたらさようならの挨拶をする。 使用楽器等:キーボード

「1. あいさつ」では、期待感を持っている様子の児童と、見知らぬ人達に囲まれ緊張している児童と様々なであった。児童の中には、活動を異なることを口走っていたが、歌の中で名前を呼ばれると反応する様子を見せていた。

「2. やさしく うたおう」(写真 1)では、サクソフフルートに興味を示す児童や、懸命に歌う児童の様子が見られた。楽器に合わせて一緒に《もみの木》の一フレーズを歌うと「やったー!」「歌えた〜!」など自信をもって取り組めたことが伺える発言も聞こえた。一方で、未だに緊張が解けず、体の動きが硬い児童もいた。



写真 1 楽器の音色に耳をすまし、皆で歌う

「3. うごいて ひょうげんしよう」(写真 2)では、円になって手をつなぎ、左右に動いたり中心に集まったり離れたりするうちに、それまで緊張していた児童や、反応の薄かった児童から笑顔が見られるようになった。特に、強い緊張を示していた児童は、ファシリテーターの声掛けによって模倣の手本の役割を担うことになった途端、生き生きと全身を使って身体表現を行った。その後、手本役を回していくと児童たちは積極的にその役割を担い、身体表現で集団を引っ張っていく姿を見せた。



写真 2 模倣から自由な自己の表現へ

「4. よくきいて やさしく ならそう」(写真 3、4、5、6)では、児童全員が演奏したい楽器を自分で選択することができた。ファシリテーターの声(歌)に耳を澄ませながら、即興演奏する箇所になると、児童は様々な様子を見せた。例えば、様々な鳴らし方を試したり、低い音から順番に音を鳴らそうとしたりなどである。また、楽器を夢中で演奏する児童もいれば、即興で入っているキーボードの存在に気付き、キーボードとの即興的なやり取りを試みる児童もいた。どの児童もリラックスした様子で即興表現を行っていたが、自分以外の児童が表現している際にもその児童の様子を集中して見つめる(聴いている)様子が見られたほか、他の児童の演奏が終わると次は自分の番と立ち上がる児童の姿も確認でき、この活動に強い興味を示していたことが印象的であった。



写真 3 様々な楽器から選ぶ



写真 4 選んだエナジー・チャイムや御鈴で即興表現を楽しむ児童



写真 5 「次は…!」と自分の順番を楽しみに待つ児童たち

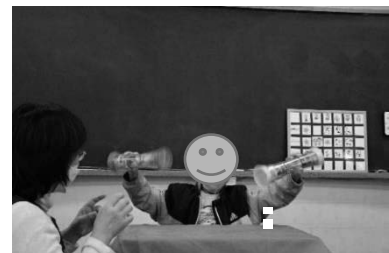


写真 6 選んだレインスティックで即興表現を楽しむ児童

「5. みんなで たのしく ならして うたおう」(写真7)では、《あわてんぼうのサンタクロース》では、擬音のところでは鳴らす楽器がそれぞれ配置されており、移動しながら一緒に歌ったり演奏したりした。最後に好きな楽器を選択して演奏する場面では、自ら楽器を取りに行こうとする姿もみられた。



写真7 音楽に合わせて合奏する児童たち

「6. ふりかえり」では、楽しかったことを伝えてくれた児童や、自身の感想だけでなく一緒に活動した仲間として他の児童を意識した発言などがみられた。

「7. おわりのうた」(写真8)では、積極的にコミュニケーションをとらない児童が自ら手を振るなど、全員がリラックスした様子で活動を終わることができた。



写真8 仲間を意識し、「さよなら」する児童たち

授業後、児童たちは、大学生たちと一緒に片付けをしたり、一緒に遊んだりしていた。また、児童たちだけで追いかっこをしたり遊んだりする様子が見られた。

## 5. カンファレンス (12月26日)

12月26日には、リモートでカンファレンスを実施し、本実践の振り返りと意見交換を実施した。参加者は、大学教員3名、特別支援学級教員1名、2年生担任1名である。

### (1) 子どもたちの様子から

特別支援学級担任、2年生担任からは、終始、楽しそうにしていた児童にとっては、自分のことを認めてもらえる良い時間だったのではないかと、開始当初は緊張が強かった児童については、「3. うごいて ひょうげんしよう」の活動で自己解放でき、その後はリラックスするとともに、次は何をやるのかなど楽しみに思いながら活動に取り組めたのではないかとのことであった。また、「一緒に音楽をする仲間」として、失敗や不正解がない中で思い切り身体や楽器を使って自己表現できたことは、緊張感を解くだけでなく参加者同士を知る機会になったこと、役割を担って歌唱活動に取り組めたことは、「仲間と一緒に音楽をつくる」楽しさを感じられていたとの意見も出た。

### (2) 活動を考案・実践するにあたって

選曲や活動方法については、季節を意識した選曲や用いた楽曲の構成が分かり易く、活動を行う上で役割分担がしやすいなど、児童たちが取り組みやすい様々な要素が含まれていたという意見が出た。児童たちの取り組みやすさについては、児童の状況に合わせて活動内容を柔軟にアレンジする必要がある。実際、「3. うごいて ひょうげんしよう」の活動では、緊張している児童がいることから、手を繋ぎ一緒に動くなど、一体感や安心感の優先した後に、個々の自由な表現へと移っていくことで、緊張感が和らいだともいえる。また、活動を展開する際のファシリテーションについても、言語によるコミュニケーションだけでなく、音楽(歌唱や演奏)によるコミュニケーションによって、児童が楽器の鳴らし方を探索したり、双方向的なやり取りが生まれやすくなる場面があったとの意見が出た。

こうした、選曲やその際の活動を考案する際に忘れてはならないのが楽器の選択である。実践後、岩本校長先生から、どのような楽器を選択するかが重要なポイントであり、楽曲や活動内容は

勿論、児童にあった楽器の選択が児童の多様な表現を引き出すのではないかと指摘を戴いた。児童たちの実態に即し、楽器や音楽の特性を十分に把握した上で、様々な側面から音楽のできることを考えていくことが、「自立活動」で音楽を活用する際の必須要件といえるだろう。

### (3) 授業後の児童の様子や他の授業への繋がり

特別支援学級担任、2年生担任からは、本実践後の児童たちがとても安定した様子で過ごしていたことが報告された。また、8月の話し合いでは、特別支援学級の児童同士で関わり合うことが少ないことを課題として挙げていたが、児童たちが一緒に遊ぶ様子が見られたことにとっても驚いたとのことだった。そして特別支援学級担任からは、同時期に偶然、武田鉄郎先生のコンサルテーションを受けており、児童たちの安心・安全の基盤を育てることの重要性をアドバイスで頂いていた。このことから、今回の授業実践は、音楽する場が安心・安全であったことが児童たちの変化につながったのではないかと指摘された。また、2年生担任からは、1年・2年の音楽科(合同で実施)を担当しており、その中で「3. うごいて ひょうげんしょう」を実践し、特別支援学級の児童2名がとびきりの笑顔で活動に参加したこと、「動きのリーダーになる！」と積極的に活動を引っ張った様子を報告された。さらに、「4. よくきいて やさしく ならそう」で使用した音楽療法の楽曲である《いっしょに鳴らそうよ》を用いて、クラスでのハンドベルの活動を引き継ぎ実践した。

## 6. 総括と次年度の課題

今年度の取り組みは、共同研究1年目ということで、大学教員や学部生は実践時に児童たちと初めて会うところから始まった。そこで、児童たちが緊張したり不安にならないよう関係性を築くことに重きを置いて授業に臨んだ。予想に反し、児童たちは、音楽を通して徐々にリラックスして活動に参加してくれたとともに、様々な場面で創造的な表現を創り出していた。このことは、児童たちにとって、加太小学校の先生方が安心できる存在であること、特別支援学級という場が安全な場所であることの証左でもあった。

次年度の課題としては、①実践をする際の空間の使い方や、児童の身長等を考えた楽器の配置など活動をする際の細やかな配慮、②音楽科はじめ「自立活動」の内容が他教科との関わり、③小規模特認校という特性を生かしたような活動、について検討していくことがあげられる。以上を踏まえつつ、児童たちの実態に即した音楽を活用した「自立活動」の考案・実践について大学と公立小学校が協働しながら引き続き研究をすすめていきたい。